

『無情』の表記と文体について

波 田 野 節 子

『無情』の表記と文体について

波 田 野 節 子

【要旨】 金栄敏は、『韓国近代小説史』（一九九七）と『韓国近代小説の形成過程』（二〇〇五）において、李光洙は『無情』を最初は国漢混用文で書き、連載直前になって純ハングル文に変更したと推論した。本論文は金栄敏のこの推論を出発点としている。本稿の第1章では、金栄敏のこの推論を検討し、当時の韓国社会に存在していた表記の二重状況について考察する。第2章では、李光洙がハングル表記を意識的に用いるようになったのは、上海亡命から帰国して短編「嘉実」を書いたときだったことを、あらたに発見した資料によって示し、それでは李光洙が国漢文で書いた『無情』の原稿をハングル表記に直したのは誰なのかを推論する。第3章では、『無情』に至るまでの李光洙の文体の変遷をたどる。李光洙は一九〇八年の翻訳「血涙」から言文一致体への道を踏み出し、表記は知識人の表記である国漢文に留まりながら文体の鍛錬をつづけた。そして『無情』の表記が勝手にハングルに変更されたときには、すでに問題が生じないだけの文体を確立していたのだった。

はじめに

第1章 『無情』の表記問題

1 「英采に関する原稿」

2 予告文と謝罪文

3 表記の二重状況

第2章 李光洙の表記変更

1 「嘉実」

2 中村健太郎
3 回想しない理由
第3章 李光洙の表記と文体

1 表記と文体に関する論説

2 李光洙の表記と文体

まとめ

はじめに

一九一七年に発表された李光洙の長編『無情』が韓国文学史で最初の近代小説と評されている理由の一つは、この小説が純ハングル文で書かれたことにある。ところが、この点について金榮敏は、『韓国近代小説史』(一九九七)と『韓国近代小説の形成過程』(二〇〇五)において、李光洙が『無情』を国漢文で書き、連載の直前になってハングルに表記変更したと主張した。本稿は、金榮敏のこの主張を出発点としている。第1章で金榮敏のこの主張を詳しく検討し、第2章では、最近筆者が発見した資料を根拠として、李光洙が小説の表記に初めてハングルを選択したのは上海から戻って「嘉実」を書いたときであったことを示し、それでは『無情』を純ハングル文にしたのは誰なのかを推論する。そして第3章で、『無情』を書く以前の李光洙は表記と文章に関してどう考えており、どのような経過をたどって『無情』の文体に到達したのかを考察することにした。

第1章 『無情』の表記問題

1 「英采に関する原稿」

一九一六年の末、李光洙は早稲田大学の近くの下宿で、新年小説を書いてくれという『毎日申報』からの依頼電報を受け取った。タイトルだけ先に送るようという指示にしたがって、李光洙は『無情』と打電し、書きためてあった「英采ヨウサイに関する原稿」⁽¹⁾を取りだすと、それをもとに冬休みのあいだ不眠不休で前半約七〇回分の原稿を一気に書いて新聞社に送った。李光洙は次のように回想している。

それでは、どうして小説を書いたのか。それは、可哀そうな両親のこと、妹たちのこと、私自身の数奇な幼年時代の忘れられぬ懐かしい記憶を書いてみたい衝動から出たことだと言えましょう。『無情』もその最初の部分の英采の幼年時代は、そのまま私の幼年時代の懐かしくも辛い記憶でした。

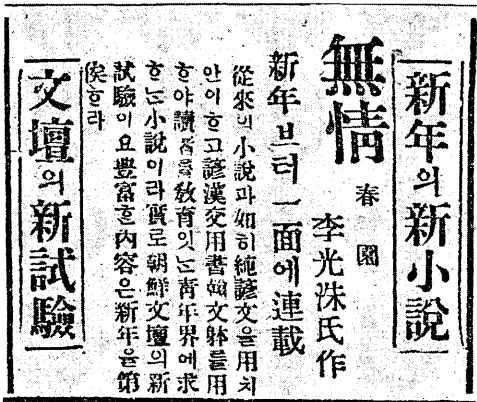
これによれば、「英采に関する原稿」の中身は、彼自身の幼年時代の「懐かしくも辛い記憶」を英采という登場人物に託して書いたものだったわけである。それでは、李光洙はその原稿をいったいどのような表記と文体で書いたのだろうか。

2 予告文と謝罪文

金榮敏は一九九七年に刊行した『韓国近代小説史』と二〇〇五年に刊行した『韓国近代小説の形成過程』において、『無情』が最初は国漢文で書かれた可能性を示唆した。その根拠は『無情』の連載がはじまる前に『毎日

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

中報』に掲載された予告文「写真1」と、連載開始時に掲載された謝罪文である。「写真2」



[写真1]

新年的新小説 無情 春園 李光洙氏作 新年부터 一面連載

從來의 小説과 如히 純諺文을 用치 아니하고 諺漢交用書翰文體를 用하여 讀者를 教育하는 청년界에 求하는 소실이라 實로 朝鮮文壇의 新試驗이오 豊富한 내용은 新年을 第侯하라 文壇의 新試驗

(新年的新小説) 無情 春園 李光洙氏作 新年より一面で連載／從來の小説のごとく純諺文を用いず、諺漢交用書翰文體を用いて読者を教育ある青年界に求める小説で、実に朝鮮文壇の新試験であります。豊富な内容は新年をお待ちあれ／文壇の新試験

この予告文は一九一六年一月二六日から二九日まで、四日間わたって『毎日中報』に掲載された。年末の三〇日(土曜日)と三一日(日曜日)の新聞は休刊だったから、連載開始のまさに前の日まで『無情』は「諺漢交用書翰文體」すなわち国漢混用の書翰文體で

書かれることが読者に広報されていたわけである。ところが一月二日に連載が始まった『無情』は予告と違って純ハングル文であり、書翰文體でもなかった。そして次のような謝罪文が掲載されていた。⁽⁵⁾

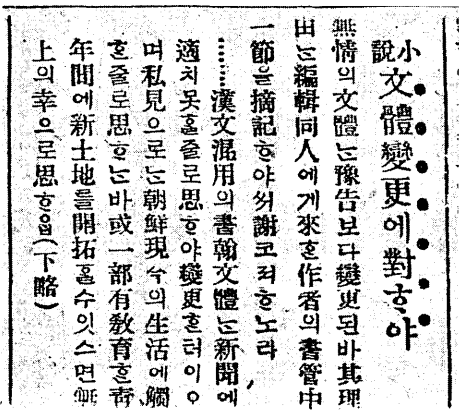
小説文體變更에 對하여

無情의 文體는 豫告보다 變更된바 其理由는 編輯同人에게 來한 作者의 書翰中 一節을 摘記하여서 謝코자하노라

……漢文混用의 書翰文體는 新聞에 適치 못할 줄로 思하여 變更한 터이오며 私見으로는 朝鮮現今의 生活에 觸한 줄로 思하는바 혹 一部有教育한 青年間에 新土地를 開拓할 수 있 으면 無上의 幸으로 思하얌 (下略)

(小説文體の變更について／無情の文體が予告より変更された件につき、その理由は編集同人に來た作者の書翰中の一節を摘記して謝罪しようと思ひます。……漢文混用の書翰文體は新聞に適さぬと思ひ、変更した次第です。私見では朝鮮現今の生活に触れたと思うもので、もしや一部の教育ある青年の間に新領域を開拓しうれば無上の幸いと存じます (下略))

これによれば李光洙は「漢文混用の書翰文體」は新聞連載に適



[写真2]

小説文體變更에 對하여

無情의 文體는 豫告보다 變更된바 其理由는 編輯同人에게 來한 作者의 書翰中 一節을 摘記하여서 謝코자하노라
……漢文混用의 書翰文體는 新聞에 適치 못할 줄로 思하여 變更한 터이오며 私見으로는 朝鮮現今의 生活에 觸한 줄로 思하는바 혹 一部有教育한 青年間에 新土地를 開拓할 수 있 으면 無上의 幸으로 思하얌 (下略)

さないと判断して、変更することを新聞社に手紙で知らせてきたわけである。だが、よく読むとこの文面はとも曖昧である。まず手紙の日付がない。この手紙は、一月二十九日に四回目の予告が掲載されたあと、純ハンゲル文で書かれた約七〇回分の原稿と一緒に届いたのだろうか。それとも国漢文で書かれた書翰体の原稿が先に新聞社に届いており、そこに差し替え用のハンゲル原稿が届いたのだろうか。あるいは、すでに届いていた国漢文の原稿をハンゲルに表記変更してくれという依頼の手紙だけが届いて、新聞社の人間がその作業を行なったのだろうか。こうした点を謝罪文から知ることはできない。何よりも、表記の変更ならともかく、書簡体の文体を簡単に変更することなどできないはずである。

予告文の「諺漢交用書翰文體」と謝罪文の「漢文混用의 書翰文體」という文言から見ても、「英采に関する原稿」は漢字交じり文で書かれた手紙形式の一人称小説だったと推定される。だが周知の通り、『無情』は三人称小説であり、英采の「手紙」は遺書しか出てこない。おそらく李光洙は『無情』を書くときに英采の「手紙」を「身の上話」に作りかえてサイドストーリーにまわし、亨植を中心にしたストーリーに作り直したのである。『無情』の前半は英采の身の上話を聞く亨植の心に湧き起こる想念の描写が中心になっている。このようにして、もともと書翰体一人称小説だった『無情』は三人称小説に生まれかわったのだと思われる。

それにしても、新聞社はどうして表記に関する予告を出したのだろうか。新連載が始まるときに小説の内容について予告し宣伝するのは一般的だが、表記に関する予告というのは珍しい。『毎日申報』が新連載は国漢文小説であることを予告したのは、それまで長編小説は純ハンゲル文というのが慣習だったからである。その背景には、知識人層と庶民層とでは使用する表記が違ふという状況があった。ここで簡単に当時の朝鮮の表記が置かれていた「二重状況」について見ておく。

3 表記の二重状況

一八九四年の甲午改革の際、高宗は勅令により「ハンゲル」を「国字」と位置づけ、それまで漢文で作成されていた公文書に国文、すなわちハンゲル文を使用することを明文化した。⁽⁷⁾これ以降、朝鮮ではハンゲルの学校教育も始まり、公的領域におけるハンゲルの使用範囲が拡大していく。しかし公文書では純ハンゲル文ではなく、意味的機能をもつ単語を漢字で表記し、文法的な機能をもつ部分をハンゲルで表記する国漢混用文が使われるようになった。国漢文をとくに好んだのは日本留学の経験者たちだった。西洋の新しい概念と文物を表わす「日本製新漢語」⁽⁹⁾を漢字語として受容することができるうえ、日本語文のなかの「漢語」を「漢字語」としてそのまま使用し、テニヲハの部分だけをハンゲル訳すれば、視覚的にはとりあえず意味が通じるからだ。国漢文は急速に普及した。

朝鮮王朝時代に漢字とハンゲルを使う二つの階層があったように、開化期には国漢文と国文を使う二つの階層があった。一八九六年に創刊された独立新聞は完全にハンゲル表記されたが、二年後の一八九八年には、知識人読者を対象とする国漢文表記の『皇城新聞』(男新聞(全分))と、漢字を読めない庶民層のためにハンゲル表記された『帝国新聞』(女新聞(암신))が創刊され、一九〇四年に創刊された『大韓毎日申報』は二つの層のためにハンゲル版と国漢文版を発行した。『大韓毎日申報』を強制買収して韓国併合後に「大韓」の字をはずした『毎日申報』はその方式を受け継いで二つの版を発行したが、一九一二年に統合して、同じ紙面に二つの表記の文章を載せるようになる。論説や政治・外交の記事は国漢文、社会記事はハンゲル文という具合である。⁽¹⁰⁾『毎日申報』は漢文愛好者のために漢文も載せたので、紙面には三通りの表記が並んでいた。⁽¹¹⁾新聞では、小説は女こどもの読みものと見なされてハンゲル文だった。逆に知識人が読む雑誌では、論説だけでなく小説まで国漢文で表記されており、あとで見ると、李光洙も中学時代からずっと国漢文で小説を書いている。

『無情』の表記と文体について (波田野節子)

『毎日申報』は大衆読者を惹きつけるために最初は新小説、ついで翻案小説の連載に力を注いだ。それらはつねに庶民のためのハングル文だった。⁽¹²⁾したがって国漢文で書かれた長編小説の連載はまさに慣例を破る「新試験」であり、新聞社としては、読者を驚かせないために、あらかじめこのことを知らせる必要があったのである。

『毎日申報』がこのような「新試験」を企てたのは、予告にあるように「読者を教育ある青年に求める」ためだった。総督府の機関紙である『毎日申報』は知識層読者の開拓に苦慮していた。後述するが、李光洙が『毎日申報』に論説を載せるようになった直接のきっかけは、『毎日申報』の記者をしていた友人が、学資に困っていた李光洙を社長の阿部充家に紹介したことである。しかし李光洙の起用は、知識人読者を獲得したいという『毎日申報』の思惑と一致した。李光洙が『毎日申報』に書いた論説が多くの知識青年から愛読されているのを見た新聞社は、彼に小説を書かせることで、青年たちを『毎日申報』の読者として確保しようと考えている。しかし先に述べたような表記の二重状況、すなわち読者が国文と国漢文という表記により二つの階層に分かれている状況においては、国漢文表記の小説を連載するという「新実験」には危険が伴った。知識青年たちを取りこむ代わりに、これまで苦勞して獲得してきた大衆読者に背を向けられる危険である。

見たように、連載開始の直前になってこの危険は回避され、その結果ハングル小説『無情』は多くの大衆から読まれて、李光洙を人気作家の地位に押し上げた。もし国漢文で表記されていたら、『無情』はあれほど多くの大衆を惹きつけることはできなかっただろう。そのうえハングル文であったにもかかわらず『無情』はその内容の近代性によって知識人たちにも読まれ好評を得た。金榮敏は、『無情』は庶民層と知識層の両方から読まれた最初の小説であり、その成功は「真の近代民族語文学の成功」だったと評価している。⁽¹³⁾

ところが、それに続けて金榮敏は、この表記変更は李光洙の「瞬間的な判断」による「偶然的決定」⁽¹⁴⁾に過ぎなかったと評価の切り下げを行なう。なぜなら『無情』のあとに連載が始まった『開拓者』の表記は国漢文だった

からだ。『無情』のハングル表記で大きな成功をおさめたにもかかわらず、どうして李光洙は『開拓者』で再度の表記変更を行なったのか。しかし、次章で見えるように、このころ一貫して国漢文で小説を書いていた李光洙にとっては『開拓者』の表記の方が自然であり、『無情』の表記がむしろ例外だった。問題にすべきは、李光洙が『無情』において取った「瞬間的」で「偶然」に見える行動であろう。ここには何か特別の要因が働いていたと推測される。

第2章 李光洙の表記変更

1 「嘉実」

次頁の「表」は、李光洙が中学時代から『無情』連載前後までに朝鮮語で書いた小説・詩・紀行文・随筆・翻訳作品を一覧表にしたものである。⁽¹⁵⁾

『無情』以前の李光洙は、一九一三年と一四年に発表した四点を除いて、すべての著作を国漢文で書いている。実は、この四点も李光洙自身の選択によってハングルで書かれたのではない。『김등의 설움(黒坊の悲しみ)』は新文館から刊行された翻訳シリーズの一冊として、崔南善の方針でハングル表記したものだ。翌年、李光洙はシベリアのチタに滞在し、在露朝鮮人の新聞『大韓人正教報』を編集したが、この新聞の方針と石版印刷という技術的な制約のためにハングルで書かざるをえなかった。⁽¹⁶⁾また、このころ『아이들 보이(子どもよ、ごらん)』に載せた朴趾源の許生伝の翻訳童話「머적골 가난방이로 한 세상을 들머들머한 허생원(墨積洞の貧乏兩班として世間を驚かした許生員)」のハングル表記もやはり崔南善の編集方針に従ったものである。朝鮮にもどった李光洙は、またもや国漢文で書きはじめた。東京留学する前に書いた「金鏡」も、東京で書いた「크리스마스(クリスマス)の夜」も、『無情』の連載が始まってすぐに書いた三つの短編「少年의 悲哀」「尹光浩」「彷徨」

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

[表] 李光洙の著作と表記

掲載年月	掲載誌／紙	作品	ジャンル	表記
1908年11月	『太極學報』第26号	「血淚」	翻訳	国漢
1909年12月	『大韓學報』第9号	「獄中豪傑」	詩	国漢
1910年2月	『少年』第3年第2卷	「어린犠牲(上)」	翻訳	国漢
3月	『大韓學報』第11号	「無情」	小説	国漢
	『少年』第3年第3卷	「어린犠牲(中)」	翻訳	国漢
		「우리英雄」	散文詩	国漢
4月	『大韓學報』第12号	「無情(續)」	小説	国漢
5月	『少年』第3年第5卷	「어린犠牲(下)」	翻訳	国漢
6月	『少年』第3年第6卷	「꿈」	詩	国漢
8月	『少年』第3年第8卷	「獻身者」	隨筆	国漢
1913年2月	新文館	『검둥의 설움』	翻訳	한글
1914年6月	『大韓人正教報』第11号	「직사의 감회」	隨筆	한글
	『아이들보이』第10号	「나라를 떠나는 설움」	詩	한글
		「먹적골 가난방이로 한 세상을 들먹들먹한 허생원」	翻訳	한글
12月	『새별』第15号	「물나라의 배판」	童話	国漢
	『青春』第3号	「새아이」	詩	国漢
		「上海서(第一信)」	紀行文	国漢
		「남 나신 날」	詩	国漢
1915年1月	『青春』第4号	「上海서(第二信)」	紀行文	国漢
	『새별』第16号	「許生傳(上) 산문시」	散文詩	国漢
3月	『青春』第6号	「내 소와 개」	隨筆	国漢
		「한그름」	詩	国漢
		「내소원」	詩	国漢
		「生活難」	詩	国漢
		「海參威모석」	紀行文	国漢
		「沈黙의美」	隨筆	国漢
		「金鏡」	小説	国漢
1916年3月	『學之光』第8号	「어린벗에게」	詩	国漢
		「크리스마스밤」	小説	国漢
1917年1月～6月	『每日申報』	『無情』	小説	한글
6月	『青春』8号	「少年의悲哀」	小説	国漢
7月	『青春』9号	「어린벗에게(第1, 2信)」	小説	国漢
9月	『青春』10号	「어린벗에게(第3信)」	小説	国漢
11月～3月	『每日申報』	『開拓者』	小説	国漢
1918年4月	『青春』13号	「尹光浩」	小説	国漢
3月	『青春』12号	「彷徨」	小説	国漢

も、『無情』の執筆を終えたあと書いた書翰体小説「어린 벗에게(幼き友へ)」も、すべて国漢文で書かれて⁽²⁰⁾いる。

こうして見ると、『無情』だけが例外的にハングル小説であることは、あまりに不自然である。金榮敏もこの点に注目して、註に次のように書いている。

李光洙は『無情』以前にハングルの文章を發表したことがないから、英采に関する原稿も当然、国漢文で書いたはずである。それなら、国漢文の『無情』をハングル文に変えた人物は誰なのか。それが『毎日申報』内部の別の筆者だという仮説も可能である。⁽²¹⁾

もともと国漢文で書かれた『無情』を李光洙以外の人物が国文表記に変えたという大胆な仮説である。だが金榮敏はすぐにこの仮説を撤回し、「ほかならぬ李光洙」が自ら表記を変更したのだと結論づける。その根拠は一九三〇年一月の『別乾坤』に掲載された「作家として見た文壇の十年」のなかにある李光洙の回顧である。

문제로 말하면, 그때의 것이大概 古文體였고 내가 國文體로 쓰기는(무정)부턴 것 같습다。⁽²²⁾ (文体について言えば、当時のものはたいがい古文体で、私が国文体で書いたのは『無情』からのような気がします)

「古文体」は国漢文、「國文體」はハングル文のことである。しかし「〴〵のような気がする(것 같다)」というのは、自分がとった行動を述べるにしては曖昧な表現ではないだろうか。『無情』の執筆は李光洙の生涯において重大な出来事だったから、彼は何度かこの時期を回想している。この六年後に書いた「多難한 半生의 途程」

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

でも、先に引用したように「英采に関する原稿」をもとに『無情』の前半を書いて送ったことを非常に具体的に回想している。ただし表記については言及していない。李光洙の回想のなかで『無情』の表記に関する言及があるのは、現在確認されているものとしては、金榮敏が引用した一九三〇年の文章だけである。

ところで筆者は最近、李光洙自身が、上海から帰ったあと初めて純ハングル文で小説を書くようになったと言っている資料を発見した。一九二一年に上海から朝鮮にもどった李光洙は、発表のあてがないままハングル小説「嘉実」を書き、二三年二月に「Y生」という匿名で『東亜日報』に発表してから、その年・〇月にこの作品を入れて『春園短篇小説集』を興文堂から刊行した。その序文で李光洙は次のように書いている。後述するが、この事実が最初に注目して日本に紹介したのは金史良である。下記では一部をのぞいて彼の訳文を用いる。

「가실」은 냇간에 무슨 새로운 試驗을 해 보느라고 쓴 것이오 「기록한이의 죽음」 「순교자」 「혼인」 「할법」 도 「가실」을 쓰던 態度를 變치 아니한 것이다。그 態度란 무엇이나 「아무쪼록 쉽게, 언문만 아는이면 볼 수 있게, 읽는 소리만 들으면 알 수 있게, 그리하고 교육을 받지 아니한 사람도 理解할 수 있게, 그리고 또 讀者에게 道德的으로 害를 받지 않게 쓰자」 하는 것이었다。／나는 만일 小説이나 詩를 더 쓸 機會가 있다면 이 態度를 變치 아니하련다。⁽²³⁾

〔「嘉実」は、私としては何か新しい試みをしようと思つて書いたもので、「偉人の死」「殉教者」「婚姻」「お婆さん」もこの「嘉実」を書いた態度と変わっていない。以下、金史良の訳文―なるべく読み易く、諺文を知つてゐる人なら、誰にでも讀めるやうに、讀んでゐる人の聲を聞いたゞけでも分かるやうに、そして教育を受けない人にも理解出来るやうに、そして讀者に道德的に害を與へないやうに書き始めた最初の作品が、この「嘉実」である。／僕が若し今後小説や詩をもつと書く機會があるとしても、この態度は變へな

いつもりだ)⁽²⁴⁾

〔新しい試み〕として「嘉実」を「諺文」で書いたというのなら、それ以前には、少なくとも意識的にはハングルだけで小説を書いてはいなかったことになる。つまり李光洙は上海からもどったあと初めて、「ハングルしか知らない人」や「教育を受けてない人」たちを小説の讀者として想定し、知識人の表記である国漢文を棄ててハングル表記を選択したわけである。「嘉実」こそ、李光洙がはじめて純ハングル文で書いた小説だった。

金史良は一九三九年の『モダン日本朝鮮版』⁽²⁵⁾に、李光洙の「無明」を翻訳している。⁽²⁶⁾おそらくこのときに底本にしたのが興文堂の『春園短篇小説集』であり、それ以下の序文に接したのである。金史良が翻訳した「無明」によって李光洙が翌年第一回朝鮮芸術賞を受賞すると、モダン日本社は『李光洙短篇集 嘉実』と『愛』の前後篇、そして『有情』を次々と刊行した。『李光洙短篇集 嘉実』には興文堂の『春園短篇小説集』に収録されていた「嘉実」⁽²⁷⁾「血書」の三篇が入れている。その巻末につけられた「紹介と解説」は無記名だが金史良によるものである。『嘉実』の解説の部分で彼は、「もう一つ讀者に紹介しておきたいことは、この「嘉実」一篇を書くに際しては、作者は、特別な気組を見せてゐるといふことである。それは今まで、小説の中に書いてゐた漢文交りを一切廃止して、純諺文で誰にも分り易く書き始めたといふことである」と高く評価して、先の序文を日本語に訳して引用している。⁽²⁸⁾一九一七年に『毎日申報』で発表された『無情』が純ハングル文であったことを金史良が知らなかったのは、このころは『無情』の時代の文学史的事実がまだ十分に整理されていなかったためだと思われる。

それでは李光洙は、なぜ「嘉実」からあと、小説を純ハングル文で書くようになったのだろうか。ここには当然、上海での二年間の体験が関係していたはずである。一九一九年に上海に亡命した李光洙は、上海臨時政府の

『無情』の表記と文体について (波田野節子)

樹立に参加し『独立新聞』の社長を務めるが、やがて臨時政府に失望し、安昌浩の興土固思想を国内で実行しようと決意して一九二一年春に帰国する。彼が帰国を決意した最大の理由は、朝鮮民衆と切り離された国外において実力養成運動はできないと考えたからだだった。李光洙は帰国した年の一月に『民族改造論』を書き、翌年二月に修養同盟会を発足させる。「嘉實」を書いたのもこのころである。

新羅人の嘉實は、戦場では勇氣を持つて戦い、奴隸になればまじめに働いて主人の家を豊かにし、つねに周囲の清潔を保ち、最後は待つていかどうかも知れぬ恋人との約束を守るために新羅に旅立つ。まさに「民族改造論」で李光洙が主張した理想の人間像を小説化したものである。民衆とともにいることを選んで上海から戻ってきた李光洙が国漢文を読めない民衆のために小説の表記を純ハングルにしたことは当然といえる。

結果的に、李光洙のこの選択は時代を先取りするものであった。一九二〇年代に入ると文化統治によって出版が許容されて小説が大量に書かれるが、それらは次第に完全な純ハングル表記へと向かっていく。

2 中村健太郎

こうしてみると、『無情』において李光洙が意識的にハングル表記を選び取った可能性は極めて低く、反対に『毎日申報』の内部の別の筆者⁽³²⁾が国漢文だった『無情』をハングル表記に変えたのではないかという金栄敏の仮説は信憑性を帯びることになる。このころ『毎日申報』には編集局長のポストはなく、かわりに中村健太郎という人物が「編集局長格」として君臨していた。⁽³⁰⁾連載開始の直前に表記を変更するような権限を持っていた人物はこの中村健太郎しかない。李光洙は一九三六年に次のように回想している。

当時、毎日申報では中村健太郎氏が編集長格で、鮮于日、李相協氏などがいたと記憶する。朝鮮で新聞に

創作小説を連載することを初めて断行するには大きな躊躇があったと思う。⁽³¹⁾多分、私の学費を送ることを主たる目的にして、このような冒険を敢行したのではないかと、毎申当局者諸氏の好意に感謝する次第である。⁽³²⁾(傍点は引用者)

一九一六年、早稲田大学の予科を修了して故郷で夏を過ごした李光洙は、大学に進学するため東京にもどる途中、京城に立ち寄った。このころ李光洙は金性洙から学資援助を受けていたが、第一次世界大戦の影響でこのインフレーションのためにその金額では勉強を続けることが難しくなっていた。⁽³³⁾京城日報社の記者をしていた友人の沈友燮は李光洙の学資不足を心配し、朝鮮人学生の援助を行っていた社長の阿部充家に彼を紹介する。⁽³⁴⁾阿部社長は『毎日申報』の「編集局長格」だった中村健太郎に、李光洙に何かを書かせて原稿料を学資として送るよう指示したのである。九月八日の『毎日申報』に載った李光洙の漢詩「贈三笑居士―東上途中에서」は「南溪幽屋始逢君」(南を流れる川辺のつつましい家で初めて君に会う)で始まっており、李光洙が東京に発つ前に中村の家を訪れて打ち合わせをしたことを推測させる。三笑は中村の号である。⁽³⁵⁾こうして李光洙の論説が九月下旬から『毎日申報』に載ることになった。

中村健太郎(一八八三―一九六九)⁽³⁶⁾は日清戦争と日露戦争のはざまの一八九九年に熊本県留学生として朝鮮に渡り、その後、京釜鉄道の社員、『漢城新報』の記者、統監府の新聞検閲係りを経て、徳富蘇峰の誘いで京城日報社に入社し『毎日申報』を「主宰」した。⁽³⁷⁾彼は朝鮮語に堪能で朝鮮の事情にも通じていたから、『青春』と『學之光』に論説や小説を発表していた李光洙の名前を知っていた可能性は高い。しかし李光洙に新聞小説を書かせてみようと考えたのは、本人からその希望を聞かされたためだと推測する。李光洙は中村に国漢文の書翰体小説を書いて話を話し、その原稿を実際に見せたのではないか。そうでなければ、『無情』は「諺漢交用書翰

文體」で書かれるという具体的な予告が『毎日申報』に出た理由の説明がつかない。それに長編を書いたことがない学生に新年小説の連載を依頼するという「冒險」は、本人から希望があり、ある程度の準備もできていることを確認したうえでなくては、責任上、中村も「敢行」できなかったはずだ。

中村は、『毎日申報』に載せた李光洙の論説が知識青年から人気を得ているのを見て、小説を書かせてみようと考えた。新聞のハンゲル小説を読まない知識青年たちも、『學之光』や『青春』の国漢文小説は読んでいるからである。そうした知識人を引き寄せるために李光洙に小説連載を依頼した時点では、中村は国漢文小説を想定していたはずである。そして、年末に届いた原稿は、前に見たような書翰体小説でこそなかったが、国漢文で書かれていた。ところが、それを見た中村は、このような漢字で埋まった小説を半年も連載したら、ようやく獲得した大衆読者まで失うのではないかという危惧に捉われたのではないか。そして作者と連絡をとる時間的な余裕がないまま、学資援助のために書かせてやっている学生の原稿だという安易な気持ちで、表記をハンゲルに替えるよう現場のスタッフに指示したと、このように筆者は推測する。

『無情』が大きな成功をおさめると、中村は今度は李光洙に朝鮮半島南部を旅行させて『毎日申報』に国漢文旅行記『五道踏破旅行』を連載させた。それにより李光洙の名声がますます高まると、知識人読者の取りこみを確固たるものにしようとして、次の『開拓者』では李光洙が書いた国漢文のままで連載したのである。⁽³⁸⁾このころの中村と李光洙の力関係は、李光洙が『京城日報』に連載した日本語版『五道踏破旅行』のリライトの件にも現われている。連載の最初の五回は、編集局が李光洙の朝鮮語原稿を日本語でリライトして(翻訳ではない)、「李光洙」の名前で掲載したものだ。これを行なったのも中村だったと思われる。⁽³⁹⁾中村健太郎の目に映った当時の李光洙は、学資のために原稿を送ってくる貧しい朝鮮人留学生にすぎなかったのである。

3 回想しない理由

とはいえ、以上はあくまでも筆者の推測である。先に述べたように、李光洙は『無情』の表記の変更について回想を残していないので、すべては推測の域に留まるしかない。だが、これまで述べてきた状況から見ると、李光洙が『無情』を国漢文で書き、それを新聞社がハンゲル文に直した可能性は非常に高いと考える。では、この推測がもし正しかったとするなら、なぜ李光洙はこのことを回想記に書いていないのか。その理由を考えてみたい。

まず考えられるのは、李光洙が実際に『無情』を、少なくともその後半はハンゲルで書いたことである。前半がハンゲル表記にされて掲載された以上、その続きを彼は最初からハンゲルで書いたはずである。「私が国漢文で書くのは『無情』からのような気がします」という回顧の曖昧さは、そこに由来すると思われる。国漢文で書かれた前半とハンゲル文で書かれた後半の文体の比較は今後の課題である。

つぎに考えられるのは、表記の変更が李光洙にとって回想するに足るほどの問題ではなかったということである。新聞社が自分に黙って勝手に表記を変えたことに衝撃を受けるか不快を感じていたら、李光洙も何らかの回想を残していたであろうが、おそらく彼はこの変更を抵抗なく受け入れたのである。すでに彼は、崔南善の新聞館発刊翻訳シリーズの方針に従って『黒坊の悲しみ』を純ハンゲル文で書いていたし、『アイドルボーイ』に発表した童話「墨積洞の貧乏両班」として世間を驚かした許生員¹は同誌の他作品に合わせて、純ハンゲル文の「一口²」体になっていた。このとき崔南善によって表記や文体が変えられた可能性も完全に否定はできない。そしてロシアでは技術的な制約のために論説までハンゲルで書いた。このような経験を持っていた李光洙にとって、外部の事情によって表記を変えることはさほど重大なことではなかったと思われる。

だが、その前提となるのは、表記を変更されても問題が生じないという自信である。李光洙は漢字語をハンゲル表記に変更しても自分の小説の理解に支障がないことに自信があったからこそ重大に感じないでいられたので

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

ある。実際、「京城學校 英語教師 李亨植은 午後 五時 四年級 英語 時間을 마치고 내려오는 六月 別에 밤을 흘리며서 安洞 金長老의 집으로 간다(京城學校の英語教師李亨植は午後二時に四年生の英語の時間を終え、降りそそぐ六月の陽ざしに汗を流しながら、安洞にある金長老の屋敷に向っている)」という国漢文は「경성학 교 영 어 교 사 리형식은 오후 두 시 사 년 급 영어 시간 을 마 치 고 내 리 쫓 이 는 유 월 별 에 밤 을 흘 리 며 서 안 동 김 장 로 의 집 으 로 간 다」とハングル表記されても問題が生じないレベルの朝鮮語文であった。朴珍英は『開拓者』の国漢文を取り上げて、「完全に韓国語文章の統辞構造に依っており、たんに表記文字として漢字を選択しただけであって、これを純ハングル表記に換えても意味や文脈に違いが生じる余地はまったくない」と述べているが、これは『無情』にもそのまま当てはまる。『無情』においては近代的文体がすでに確立されていたために表記の変更は李光洙にとって大きな意味をもたず、それゆえ回想されないという結果になったのであろう。

第3章 李光洙の表記と文体

1 表記と文体に関する論説

それでは、このころの李光洙は表記と文体についてどのように考えていたのだろうか。『無情』を書く以前に李光洙は表記と文体に関する論説を三つ書いている。一九〇八年の「国文과 漢文의 過渡時代」、一九一〇年の「今日我韓用文에 對하야」そして一九一六年の「文学이란 何호」である。

明治学院四年生のとき『太極学報』に掲載された「国文と漢文の過渡時代」は李光洙の活字化された最初の文章である。このなかで彼は、国民の精髓である国語を他国の文字である漢字によって表記したことが今日の大韓帝国の惨状を招いたとして、漢文を全廃して国文だけで書くことを主張している。国文のみで書こうという主張を国漢文で書かねばならなかったところに、当時の表記の状況がよく現われている。このころの李光洙にはまだ創作経験がなかったから、この論説は周囲の論調の影響のもとで書かれたとみなされるが、李光洙が文章行為の最初から表記に関心を抱き、また民族意識に根差したハングル表記の志向を持っていたことを示している。

一九〇九年末から旺盛な創作活動を始めた李光洙は、日韓併合の前月、『皇城新聞』に「今日我韓用文について」という論説を発表し、このなかで「純国文か、国漢文か」と問いかけて、自分としては純国文で書きたいし、無理すればできないわけではないが、それでは困難があまりに多いうえ、ハングルだけで表記すると「新知識の輸入を沮害」することになるから他日を期すことにして、いまは国漢文で書こうと主張している。ただし彼が主張する国漢文は、現在横行している「漢文にハングルで送り仮名をつけた」に過ぎないようなものではなく、「固有名词」および「漢文に由来する名词・形容詞・動詞」など、ハングルでは書けないものだけを漢字にした国漢文である。当時一八歳の李光洙は、とりあえず国漢文で書きながらハングルで表現できる領域を広げていくという現実的な選択をしていた。そして、その主張どおり彼はこのあと文章鍛錬をつづけ、『無情』に至る文体を完成させていくことになる。

『無情』を書き始める前の月に発表した「文学とは何か」で注目されるのは、「表記」と「文体」とが分けて述べられていることである。李光洙は、朝鮮の小説にも最近「純国文」と「純現代語」が使われていて喜ばしいと書いているが、この「純国文」はハングル表記、「純現代語」は言文一致体を意味している。李光洙は「国漢文を用いるとしても、話すがごとく最も平易に最も日用語らしくすべし」、すなわち「表記」は国漢文であっても「文体」は言文一致体にするようにと主張し、「日本文の変遷を見ても、山田美妙が三十年余りに言文一致体を主唱して以来、文学的な作品はもろろん科学・政治・論文等にいたるまで純現代語を採用するようになった」と、山田美妙の言文一致体の主張を例に挙げている。

山田美妙が提唱した言文一致体はもろろん文体に関するものであって表記とは関わない。日本語の表記は一

貫して国漢文である。国漢文表記のままあらゆる分野で「純現代語」言文一致体」を採用している日本語のように、朝鮮語も国漢文で表記しながら文体を言文一致体にしていくことを李光洙は主張していた。「表記」と「文体」のうち、「表記」はとりあえず国漢文を使用して漸進的に純ハングル文へと移行させていき、一方で「文体」は早急に言文一致体にすべきだというのが、『無情』を書いたころの李光洙の考えだったのである。

2 李光洙の表記と文体

それでは李光洙がどのような文章を書きながら『無情』の文体に到達したのかを見てみよう。これまで見たように「嘉実」を書く以前の李光洙は国漢文で表記していたが、文体に関しては、最初の文学的文章である一九〇八年の「血涙」からすでに言文一致体の方向へと踏み出し、「어린 犠牲」ではほとんど完成していたのではないかと筆者は考えている。もちろん「노라」「더라」「이러」の語尾はこのあと長く彼の文章に残っており、ここで言う「言文一致」とは、あくまでも目で見る文字ではなく話す音声を尊重する態度であり、自己の内面の声と結びついた声を文章化する創作態度のことである。たとえば「血涙」にはローマの奴隷スパルタクスの演説として次のような文章がある。

슬프다, 余의 父母는, 何處에서, 余를 爲하야, 泣하사는가。 何處에서, 余를 爲하야, 祈禱하사는가。 天國인가, 人間인가, 地獄인가。

(中略) 余로, 하여금 父母를 離別케 한者 誰며, 余의 權利를 剝奪한者 誰며, 余의 自由를 拘束한者 誰며, 余로, 하여금 惡魔되게 한者 誰로!⁽⁴⁸⁾ (傍点は引用者)

(悲しい。余の父母はどこで余のために泣いているのか。どこで余のために祈っているのか。天国か、人の

間か、地獄か―中略―余をして父母と離別せしめた者は誰で、余の権利を剥奪した者は誰で、余の自由を拘束した者は誰で、余をして悪魔にならしめたものは誰か！)

国漢文で書かれていながら、漢字の向こう側から音声響いてくるようである。それは国を奪われた孤児、李光洙自身の内面の声でもある。

李光洙は週末ごとに仲間たちを集めているんな話を聞かせたと述懐している。⁽⁴⁹⁾ 自分が見た映画のストーリーを仲間たちに口述したうえで筆記したが、彼の文章の音声化に寄与したと推測される。⁽⁵⁰⁾ しかし、この時点ではまだ文体を創りだせるようなレベルに至っていなかったために、たとえば「우시는가」と口で言っても「泣하사는가」と書き、「누구며」と話しても「誰며」という日本語風の書き方になったのだろう。とはいえ同じように日本語に囲まれながら創作を始めた金東仁と比べれば、李光洙の文章には不思議なほど日本語の影響が感じられない。これは、音声によって文章を創るといふ彼の態度とも関わっているが、屋敷から出ないで下層の者との会話も禁じられて幼年期を過ごした金東仁と違い、故郷と京城で多くのことを経験し、田舎では従妹たちから口伝の歌を習ったり本を借りて読んだりして、朝鮮の情緒が身に付いていたことが役立ったと思われる。

「血涙」から一年後に本格的な初期創作期に入った李光洙の最初の朝鮮語創作、短編「無情」は、まだ朝鮮語の使用にぎこちなさがあった硬直した印象を与えるが、映画から翻訳した「어린 犠牲」では、非常になめらかな文章を作りだしている。このあとにも翻訳は李光洙が朝鮮語の文章を練くにあたって大きな助けとなった。一九一三年に新文館から出した翻訳『黒坊の悲しみ』は明治時代に日本で出ていた二つの抄訳を組み合わせたものだが、このなかで李光洙は二冊の底本をあるいは訳し、あるいは要約し、あるいは自分の創った文章を挿入するなど様々な工夫を凝らしている。その文体が一九三〇年代にも違和感なく読めるほど新しいものだったことは、

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

一九三五年から六年にかけて雑誌『千里』にほぼ修正されないまま再録されていることが証明している。⁽¹²⁾
 『黒坊の悲しみ』を刊行したあと、大陸を放浪しながらも李光洙は文章の鍛錬をつづけた。シベリアの在露朝鮮人の刊行物に記事を書き、崔南善に雑誌の原稿を送り、帰国してからは小説のほかに紀行文や論説も書いた。『金鏡』や『크리스마스밤』を書くころ、彼の文章はすでに『無情』と同じほどにハングル表記に堪えるものになっていた。一九一六年末に『無情』の表記が新聞社の判断でハングルに表記変更されたのは、たしかに「瞬間的」で「偶然」の出来事であったが、それによって影響されないだけの文体を李光洙はすでに作り上げていたのである。

ま と め

本稿は、定説をくつがえして金榮敏が行なった、『無情』はもともと国漢文で書かれたという主張を出発点としている。第一章ではこの金榮敏の主張を検討し、『無情』の時代に存在していた二重表記の状況について考察した。第二章では、李光洙が意識的にハングル表記を選択したのは上海亡命から帰国して「嘉実」を書いたときであることを、あらたに発見した資料に基づいて示し、李光洙が国漢文で書いた『無情』をハングル表記に変更したのは『毎日申報』の編集局長格だった中村健太郎であろうと推論した。第三章では『無情』にいたるまでの李光洙の文章の道筋をたどった。一九〇八年の最初の翻訳「血涙」のときから李光洙は言文一致に踏みだしたが、表記は国漢文に留まっていた。彼は翻訳や創作によって文章の鍛錬をつづけ、『無情』の表記が『毎日申報』の編集局の判断でハングルに変更されたときには、それに影響されないだけの文体をすでに作り上げていた。この変更からさしたる衝撃を受けなかった李光洙は、したがってこの出来事を回想することもなかったのである。

註

- (1) 「文壇苦行三十年(其二)」、『朝光』、一九三六年五月号、一〇四頁／「多難한 半生の 途程」、『李光洙全集』14、三中堂、一九六二、三九九頁
- (2) 同上
- (3) 金榮敏『韓国近代小説史』、奇、一九九七、四四六一—四五頁。『韓国近代小説의 形成過程』、소명출판、二〇〇五、一六八—一七二頁
- (4) 予告文と謝罪文は分かち書きして現代表記に直してある。
- (5) 李光洙の書翰文体については崔珠瀚の論文「『無情』의 近代 文體와 書翰」、『서강인문논총』四二집、二〇一五を参照。
- (6) 第一面に掲載するという予告とは違い、『無情』の第一回は三版三面に掲載されたが、一月三日の第二回からはずっと一面に掲載されている。謝罪文は一版三面に掲載された。
- (7) 表記に関する歴史的な状況については以下を参考にした。金榮敏『文学制度 吳民族語의 形成과 韓国近代文字(二八九〇〜一九四五)』第2章「近代民族語의 形成과 近代文学 文體의 定立」、소명출판、二〇一二、一三九—二五
- (8) 朝鮮人の手による最初の朝鮮語雑誌は一八九五年に留學生たちが日本で創刊した『親睦会会報』だが、これは国漢文で表記されていた。前掲、金榮敏『文学制度 吳民族語의 形成과 韓国近代文学(一八九〇〜一九四五)』、四二—〇〇八
- (9) 前掲、李妍淑「朝鮮における言語的現代」、八五頁
- (10) 『毎日申報』が一九一二年に実施した紙面改革については咸苔英『一九一〇年代小説의 歴史的意味』、소명출판、二〇一五、一九一—一九七頁
- (11) 一九一七年(丁巳年)一月一日に連載が始まった『無情』の第一段に掲載された呂圭亨の「蛇譜」は純漢文である。
- (12) 一九一〇年代に『毎日申報』に掲載された九八編の小説のうち国漢文作品は七編のみで残りはすべて純ハングル文だった。前掲、咸苔英『一九一〇年代小説의 歴史的意味』、六二—六三頁

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

- (13) 前掲、金榮敏『韓国近代小説の形成過程』、一六八頁
 (14) 同上、一七〇頁
 (15) 同上、一六八頁
 (16) 一九一五年三月『青春』六号に掲載された三つの詩にはほとんど漢字が使われていないが、これは主として固有語で書かれ、漢字語自体が使われていないためである。
 (17) 崔珠瀚「李光洙와『大韓人正教報』」九・十・十一号에 대하여、『李光洙와 植民地文学의 倫理』、소명출판、二〇一四。同書の「付録」には『大韓正教報』の記事一四編と『勸業新聞』の記事一編が収録されている。
 (18) 李光洙は在露朝鮮人の新聞『勸業新聞』にも論説を書いたが、こちらも純ハングル表記の新聞だった。崔起榮は「国文専用は読者層の教育程度や、石版印刷問題とも無関係ではないだろうが、僑胞新聞での一つの特徴でもある」としている。『植民地時期 民族知性과 文化運動』、도서출판한울、二〇〇三、一五五頁
 (19) 崔珠瀚「近代小説 文體 確立을 向한 또 하나의 道程」『近代書誌』七号、二〇一三、二〇五、二一九頁
 (20) 「少年의 悲哀」尹光浩「彷徨」は小説の末尾にそれぞれ(一九一七、一、一〇朝)(一九一七、一、一一夜)(一九一七、一、一七)と執筆日が記されていて、『無情』の連載が始まって間もない一月中旬の一週間のあいだに執筆

されたことがわかる。また、『三千里』一九三三年一二月号の特集「新聞小説과 作者心境」に書いた『有情』을 세로 쓰면서「『有情』の新連載にあたって」のなかで、李光洙は「어린 벗에게」を『無情』に引きつづいて書いたことを回想している。

- (21) 前掲、金榮敏『韓国近代小説の形成過程』、一七〇頁、註六〇
 (22) 前掲、金榮敏『韓国近代小説史』、四四七頁。李光洙の回顧文は『李光洙全集』16、三九五頁
 (23) ただし現代表記にしてある。この序文は『李光洙全集』に収録されていない。
 (24) 金史良の訳文が載っているのはモダン日本社が一九四〇年四月に出した『李光洙短篇集 嘉実』の「紹介と解説」三五二頁である。金史良は京城興文堂発行の『春園短篇小説集』とのみ書いて、刊行年を記していない。西江大学の崔珠瀚氏の協力を得て探したが韓国の図書館には見あたらず、結局、東京外国大学付属図書館にあるのを見つけた。この場を借りて崔珠瀚氏の協力を感謝の意を表す。
 (25) 一九三九年一月一日発行。このとき『モダン日本朝鮮版』に翻訳紹介された小説は「嘉実」のほかは李孝石の「蕎麦の花の頃」、李泰俊の「鴉」である。
 (26) 金史良はこの作業をしている時期の一九三九年、〇月

四日から六日まで三回にわたり『朝鮮日報』に「朝鮮文学側面観」を連載した。第一回で彼は、「とくに今回はある雑誌社の朝鮮文学の翻訳紹介に参画し、ますます朝鮮文学

について感じる場所が多かった」と書いている。金在湧・郭炯徳編『金史良、作品과 研究2』、도서출판역락、二〇〇九、三〇九頁。この文章の存在をご教示くださった金在湧氏にこの場を借りて感謝の意を表す。

- (27) 『李光洙短篇集 嘉実』、三五二頁。なお『有情』の解説によれば、「嘉実」と「血書」を訳したのは『有情』と『愛』前篇・後篇を訳した金逸善である。金逸善については以下の論文がある。大村益夫「野葡萄」と金逸善、『植民地文化研究 資料と分析』第一三号、二〇一四、四一―五三頁

- (28) 金史良が、このころ『朝鮮日報』に連載した「朝鮮文学側面観」の第三回「下、漢字問題、觀察、教養 二外」のなかで表記問題に言及しているのは、「嘉実」が李光洙の最初の純ハングル小説であることを知って刺激を受けたせいではないかと思われる。彼は、三〇年前まで漢文の重庄のもとにあった朝鮮文学がハングル文学に移行しえたのは「先人の熱情」によるものだと言っているが、興味深いことにそれと同時に、「漢字の二字も混じっていないハングルだけの文章を読むのは、大部分の読者にとって大変な

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

苦痛だと思ふ」として、朝鮮語になじんだ漢字に限って復権させることを提案している。

- (29) このころ『京城日報』には松尾という編集局長がいたが、『毎日申報』には編集局長のポストがなかった。『社史で見る日本経済史 植民地編第二巻―京城日報社史』、ゆまに書房、二〇〇一
 (30) 中村は、自分が『毎日申報』を「主宰」していたと回想している。中村健太郎『朝鮮生活五十年』、青潮社、昭和四四年、五七頁

- (31) 『毎日申報』にはそれ以前に李海朝や李人植が創作した小説が連載されているので、李光洙のこの回顧は不正確である。あるいは自分が『京城日報』に朝鮮人として初めて執筆したと混同しているのかもしれない。どちらにしても、『無情』が連載されるころには趙重桓の『長恨夢』や何夢の『海王星』のように翻案小説が中心になっており、創作小説の連載はとだえていた。

- (32) 「文壇生活三十年의 回顧」、『朝光』一九三六年六月号、一一七頁／「多難한 半生의 途程」『李光洙全集』14、四〇一頁

- (33) 波田野節子、『韓国近代作家たちの日本留学』、第一章 李光洙の第二次留学時代、四九頁

- (34) 『毎日申報』一九三八年五月五日「座談会―創刊以来

三四年本報成長の回顧」。この席で沈友燮は阿部が自分の俸給のなから毎月五円を李光洙に送ったと回顧しているが記憶違いであろう。李光洙は原稿料として受け取ったと書いており、実際、人気の度合いに応じて原稿料は増えている。なお、この座談会に出ている中村健太郎は、李光洙が『京城日報』に最初に執筆した朝鮮人であることや、『五道踏破旅行』が読者に愛読されて、「内地人」に朝鮮人のことを理解させる効果が大きかったことを回想している。

(35) 金栄敏もこの人物に注目し、詳しく調べている。「李光洙初期文学의 変貌過程」、『李光洙文学의 再認識』、全明舎刊、二〇〇九、三七―四一頁

(36) 前掲、中村健太郎『朝鮮生活五十年』、九一五〇頁。中村は一九二二年に『毎日申報』を解雇されたあと、總督府に嘱託として入り、検閲の仕事をしなから、一九二四年には内鮮融和団体である同民会の創立に関与して理事となり、一九二五年には財団法人朝鮮仏教団の創立に関わって朝鮮仏教社社長として『朝鮮仏教』誌を主宰した。二・二六事件で倒れた齋藤實を追悼する文章を編纂して『齋藤子爵を偲ぶ』を一九三七年に朝鮮仏教社から刊行している。解放後は郷里の熊本にもどったが、息子は戦死し、引揚げの時に財産を失い、若いときに病んだ脊椎カリエスの後遺症で身体が不自由だったために、最後は生活保護を受けて

茶の行商をしていたという。彼は一九六七年に『歌集・三笑』(三章文庫)、一九六九年七月に『朝鮮生活五十年』(青潮社)を刊行して、その年の一月に亡くなった。浜田正雄「中村健太郎さんを悼む」『親和』第一九七号、一九七〇。李喜益「中村健太郎先生の御永逝を悼む」『親和』第二〇〇号、一九七〇。このほかに入手できる資料としては一九二九年刊行の『朝鮮統治問題論文集第一集』に中村の論説「理解と同情(抄)」が収められている。雑誌『朝鮮仏教』は未見。一八八三年という生年は『歌集・三笑』のなかの昭和三四年に七七歳を迎えて詠った短歌に付けられた「明治一六年七月七日熊本市池上町に生る」という記述による。(同書二五頁)『毎日申報』の解雇については阿部充家が中村本人の手紙を同封して、齋藤実に送った書簡が残っている。国会図書館憲政資料室。齋藤実関係文書その一書簡の部一二八三部部充家38。總督府に嘱託として入った年度は、内田じゅん「植民地朝鮮における同化政策と在朝日本人」、『朝鮮史研究会論文集』四一号、二〇〇三、一九七頁、註二一

(37) 前掲、中村健太郎『朝鮮生活五十年』、五七頁

(38) 読者の人気を得た李光洙の存在感と発言権が増していたので、『無情』のときのように安易に表記を変更できなかったという可能性も考えられる。

(39) 波田野節子「일본어관『오도담과여행』을 쓴 것은 누구인가」、『尚虚学报』第四二輯、尚虚学会、二〇一四、二〇三―二一四頁

(40) 朴珍英「翻訳과 翻案의 時代」、全明舎刊、二〇一一、一九〇頁。氏はブログで「開拓者」の冒頭部分を実際にハンケルに置き換えた例を提示している。http://blog.naver.com/bookgram/12009896421

(41) 『太極学报』第二二号、一九〇八年五月

(42) 『皇城新聞』、一九一〇年七月二四日、二六日、二七日

(43) 임상식은前掲書中で国漢文の類型を漢文文章体の「漢主国従」、漢文句節体の「国主漢従」、漢文単語体の「国主漢従」の3類型に分け、この外側に「国文化の程度がさらに進んだ」「少年」の国漢文が存在したとしている。一四三頁

(44) 『毎日申報』、一九一六年十一月一九日「文學과文」／『李光洙全集』1、五一―四一五―五頁

(45) 原文 國漢文을 用하더라도 말하느 模樣으로 最히 平易하게, 最히 日用語답게 할 것이니라.

(46) 原文 日本文의 變遷을 보더라도 山田美妙氏가 三十餘年前에 言文一致體를 主唱한 以來로 文學的作品은 勿論 이어나와 科學・政治・論文等에 至하지까지도 純現代語를 採用하게 되니

『無情』の表記と文体について(波田野節子)

(47) たとえば柄谷行人は『日本近代文学の起源』のなかで、音声に対する漢字の優位が逆転すれば、漢字を選ぶか仮名を選ぶかは選択の問題にすぎないと述べ、漢字の優位の否定は様々なコンテキストで考えることができるので、一見無関係な領域で生じた変化も、広い意味では「言文一致」の展開としてみることができるとしている。『定本日本近代文学の起源』、岩波書店、二〇〇八、五〇頁

(48) 「血淚」『太極学报』第二六号、五四頁

(49) 「春園文壇生活二十年을機會로한『文壇回顧』座談會」、『三千里』一九三四年十一月号、二四〇頁

(50) 「李光洙と翻訳―『召童의 설움』を中心に―」、『東京大学 韓国朝鮮文化研究』第一三号、二〇一四、三頁

(51) 底本になったのは、堺枯川(利彦)の『家庭夜話第三冊 仁慈博愛の話』(内外出版協会、1903)と百島冷泉の『通俗文庫第二編 奴隷トム』(内外出版協会、一九〇七)である。前掲、「李光洙と翻訳」を参照。

(52) 『三千里』一九三五年九月号から一九三六年四月号に、旧式の語尾もそのまま収録された。ただし四月号には二一節の途中までしか収録されていない。最終章は二四節なので五月号に入っていると思われるが、影印本がなく現在のところ確認できない。

〔謝辞〕 本稿は日本学術振興会より科研費助成を受けた基礎研究(B)252284072の成果の一環である。

本稿は、二〇一五年五月三〇日に高麗大学で行われた韓国語国文学会国際学術大会での招請発表「『무정』의 표기와 문체에 대하여」の内容を一部修正したものである。

(新潟県立大学名誉教授)